

書評

Zoltán Kövecses

Metaphor: A Practical Introduction Second Edition

Oxford University Press, 2010, 396 頁

佐原希生*

Kio SAWARA

1. はじめに

本稿にて紹介する *Metaphor: A Practical Introduction Second Edition* は、メタファーについての諸議論を認知言語学の立場から整理しながら、それらを丁寧に腑分けしたものである。本書の著者である Zoltan Kövecses はハンガリー出身の認知言語学者である。ブダペストにある Eötvös Loránd 大学にて教授職に就いたのち、2003 年よりカリフォルニア大学バークレー校に移り認知言語学の第一人者であるジョージ・レイコフとともにメタファー研究を行っている。研究の関心は感情の概念化、メタファーとその慣用性、言語と心と文化の関係性にあり、認知言語学的観点からそれらに取り組む。

評者は本稿において、本書で紹介されている認知言語学上のメタファーにまつわる議論について紹介するとともに、本書の認知言語学のパラダイム上の位置付けについて述べる。文法を意味的な要因や語用論的な要因と不可分のものであるとする認知言語学において、Lakoff and Johnson (1980) 以降メタファーに重点を置いて包括的な議論を行うものは少なく、本書は認知言語学におけるそれまでのメタファーについての蓄積をひとところに俯瞰するための著作として適するものであり、本稿にて紹介する意義は欠かないだろう。

2. 本書の概要

本書は 19 章からなり、内容に基づいて大きく三部に分けることができる。1 章から 5 章までは、概念メタファーにはどのようなものがあるか、具体的な例を挙げながら様々な場面におけるメタファーの表れ方に着目して述べる。6 章から 11 章まではそれら概念メタファーの基盤となるものを提示し、どのような背景をもって概念メタファーが機能しているかを解説している。12 章から終わりまでは概念メタファーについての周延的な議論をそれぞれに章分けして取り上げている。

本稿では、まず 1 章で整理されている基礎概念を確認し、本書の各章についての概観をこころみたい。認知言語学においては、「メタファー」とは次のように定義される。

メタファーとはある概念ドメイン¹を別の概念ドメインから理解することである。
(Kövecses 2010:4)

また、認知言語学ではとりわけ「概念メタファー (conceptual metaphor)」というものが重視され、単なる一修辞・文彩にとどまらない地位を持ち、それは実際の言語上のメタファー表現とは区別して考えられている。具体的な例を挙げたい (以下、概念メタファーについてはすべて大文字によって表記する)。

* 大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士前期課程 ; sierra_memory@yahoo.co.jp

AN ARGUMENT IS WAR

この概念メタファーに対して次のような実際の言語表現が対応すると考えられる（以下、評者訳）。

Your claims are *indefensible*. （君の主張は守りようがない（／弁護の余地が無い））

He *attacked every weak point* in my argument. （彼は私の議論におけるあらゆる弱点を攻撃した）

His criticisms were *right on target*. （彼の批判は的を射ていた）

すなわち、概念メタファーは具体的な言語表現の上位概念的なところに置かれているものである。また、このときの ARGUMENT の位置にあるものがターゲットドメイン（*target domain*、以下ターゲット）、WAR の位置にあるものがソースドメイン（*source domain*、以下ソース）とされ、ターゲットには抽象的な概念が、ソースには具体的・物質的な概念が要請される。つまり抽象的な概念を、比して具体的な概念によって理解することがメタファーの本質であるといえる。またこのように、あるターゲットに対して何らかのソースが対応する、この認知的な領域における関係のことを写像（*mapping*）と呼ぶ。本書においては、この概念メタファーが我々の言語活動にどのように作用しているかを中心に見てゆくものである。

具体的に各章におけるテーマについて紹介する。稿の関係上、ここですべてを詳らかに示すことはしないが、それぞれの章においていかなる議論がなされてるかを最低限示したい。1章はまず「メタファーとは何か」という基本的な問いから始まり、以下の章立てがどのように行われるかを明示する導入の章である。2章ではどのような概念がターゲット／ソースとなりやすいのかを具体的に考え、3章で概念メタファーのいくつかの種類を見る。4、5章では今度は言語／非言語的なメタファー表現について具体的に例が挙げられ、それらが個別でいかなる性質をもつのかを考証する。ここまでが概念メタファーについての基本事項を押さえた第1部であるといえる。

第2部では概念メタファーの背景について解説される。6章では、のちにも示すが、我々は何を基盤として特定のターゲットに対してソースを選択しているのかを「人的要因（*human factor*）」によるものとして分析する。7章では、写像の関係がそれぞれ不完全なものにとどまっていることを示す。8章では、概念メタファーによって、喜びや怒りのような感情が具現化（*embodiment*）される、すなわち実体をもつもののようにして表現されることを示す。9章ではソースとターゲットの間の写像において、含意（*entailment*）がどのように影響するかを考える。10章では、ソースが複数のターゲットに適用される際のその適用の範囲について考える。例えば、「建物（*BUILDING*）」というソースは、それぞれ「～ IS(ARE) A BUILDING(S)」という形で、「関係性（*RELATIONSHIPS*）」や「人生（*A LIFE*）」などのターゲットに適用されるが、そのターゲット範囲について着目する章である。11章にて概念メタファーをいくつかのモデルに分類し、それらがシステムとしてどのように相互で機能し合っているかを論じる。このように、概念メタファーの基礎やメカニズムについて示した6章から11章までを第2部とした。

12章以降ではメタファーそのものの議論が第1部・第2部で踏まえられたのち、その周辺についての様々なトピックを取り上げながら紹介しており、本稿においてはこれを第3部とした。12章はメトニミー（換喩）について触れられた章で、認知言語学のなかでメタファーとどのような相違があるのかが示された。13章はのちの節でも紹介するが、概念メタファーの普遍性について論じる章であり、具体的には、英語だけでなく日本語やハンガリー語、ズールー語などの複数の

言語におけるメタファー表現を比較し一貫して認められる概念メタファーを採集することで、その人間における認知機能とそれに伴う概念メタファーの普遍性について述べている。14章ではメタファーの文化的・個人的・地理的な差異について考える。15章ではイディオムという言語的な表れと概念メタファーとの関係性について示し、16章で言語学習においてイディオムにみられるようなメタファーをどのように考えればよいかを議論している。17章では、Fauconnier and Turner (1994) による言語理論のなかで、人間の認知機能に対してメタファーがどのように作用しているかが論じられていることを紹介している。18章は会話 (discourse) のなかでメタファーがどのように現れるかを、スピーチなどの具体的なテキストを例に挙げながら分析する章である。そして最終の19章では、本書の総括としてまとめを行っている。

また本書の特徴として、入門書としての側面があり、各章において認知言語学の研究の蓄積が紹介されているほか、その章の内容に準じた練習問題も用意されている。

3. 本書における議論

本書は入門書として著されており、「メタファー」を取り巻く議論が19章にも及んで紹介されている。各章ではそれぞれの議論の要点が認知言語学の立場から述べられ、それらについて丁寧な解説がなされているものの、詳細にわたる記述については各章の最後に紹介する論文に譲っている。ここで、本節においては本書にみられる踏み込んだ議論の一つを紹介したい。

さて、著者が本書で解説する「メタファー」は、認知言語学的なものであるが、それは本書の中にも対比されて語られるように、修辞学の一分野に過ぎなかった伝統的なメタファーのカウンターとしてあるものである。伝統的なメタファーとは「類似性に基づいた比喻」のことであった。すなわち、喩えるもの (ソース) と喩えられるもの (ターゲット) の間に何らかの類似性が了解されていた一方で、それは文全体の真偽が問われた際に偽とされうるようなものであり、意味論的な価値を見出されることがなかったといえる。

一方で著者は6章において、それと対置させるように、認知言語学における概念メタファーの「経験的基礎 (experiential bases)」あるいは「動機付け (motivation)」について次のように述べる。

ソースの選択は非客観的 (nonobjective) で、文字通りでない (nonliteral) かたちで、前から存在するようなものではない (nonpreexisting) ような人的要因に依拠している。(Kövecses 2010:88)

著者は続いて次の四つの「人的要因」としての動機付けについて言及する。

1. Correlations in experience (経験の相関)
2. Perceived structural similarity (構造上の類似)
3. Perceived structural similarity induced by basic metaphor (基本的なメタファーに惹起される類似)
4. Source being the root of the target (ターゲットの根本にあるソース)

それぞれを見てゆきたい。

1. Correlations in experience (経験の相関)

筆者が挙げている例で最も端的で理解しやすいものは、MORE IS UP という概念メタファーで

ある。例えば水の入っている器に水を加えると水嵩が増す。何かを加える (MORE) ことが何かの嵩が増す (UP) ことを引き起こす、というような経験が日常において蓄積されることによって、量を表す MORE が垂直的な移動を表す UP とともに相関して概念化されるということである。このような概念メタファーの裏付けとして次のような言語表現が存在する。

The crime rate keeps *rising*.

The number of books published each year keeps going *up*.

そのほか筆者は、身体的機能を経験の基盤を置く ANGER IS HEAT などの感情のメタファーについても相関性をもつものとして示している。

2. Perceived structural similarity (構造上の類似)

筆者は LIFE IS A GAMBLING GAME という概念メタファーを挙げ、次のようなメタファー表現を提示する。

I'll *take my chance*.

The *odds are against me*.

He *won big*.

筆者はそれぞれのドメインが先んじて属性として類似性をもつわけではなく、認知する主体が LIFE と GAMBLING GAME との間に類似性を見出し、言語表現が生まれるとしている。

3. Perceived structural similarity induced by basic metaphor (基礎的なメタファーに惹起される類似)

筆者がここで挙げる概念メタファーは IDEAS ARE FOOD である。次のような表現が想定される。

I can't *swallow* that claim.

I can't *digest* all these ideas.

これらの表現に際し、次のような類似性が見出される。

swallowing ⇒ accepting

digesting ⇒ understanding

またこの例が 2 と異なる点というのは、これらのメタファーが、3 章で示された存在のメタファー (ontological metaphor) を基盤とし、抽象的で非物質的なものに対してそれが存在物であるかのように考えているという点にある。

4. Source being the root of the target (ターゲットの根本にあるソース)

筆者はこの動機付けでは生物学的 (biological) なものと文化的 (cultural) のものとに分けられるとする。例えば前者では AFFECTION IS CLOSENESS (He's *close* to his grandmother.) のような概念メタファーがあり、これらは親子や恋人のような生物学的なところからターゲットとソースとが生じているとされる。一方で後者では SPORT IS WAR (the two *battling* team) のように歴史的・文化的に発達した関係であるといえる。

ここで取り上げた議論は、概念メタファーの議論の嚆矢ともいえるべき Lakoff and Johnson (1980) の議論に対し、Grady (1997) に示された論点を踏まえながら、それらよりも明快な分類によって端的に説明している。本書の高く評価できる点としては、それまでのメタファーに関する議論を踏まえた上で、簡明な表現で説明されている点であるといえよう。

4. 本書への指摘

本書における評価としては、Lakoff and Johnson (1980) 以降のメタファーに関する蓄積を丁寧に分かりやすく紹介した労作であるといえる。その一方で、入門書であるがゆえにとりわけ著者独自の論の抜本的に立ち上げるということではなく、やはり Lakoff ほか他の認知言語学研究の紹介としての側面が強い。そこで、(認知言語学全体に対してのものも含まれるが) 見出しうる批判点を挙げてみたい。

まず、本書 13 章「The Universality of Conceptual Metaphor」において、日本語を含むいくつかのほかの言語における概念メタファーの共通例が挙げられる。それは怒り (Anger) についての ANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINER (怒りは容器の中の熱い液体) という概念メタファーであり、この概念メタファーについて複数の言語について比較検討している。例えば英語においては、

You make my blood *boil*. (あなたは私の血を煮えたぎらせる)

という表現などがあるように、各言語のこのような例を列挙している。その例のうちに日本語も含まれており、そこで挙げられている例は次のようなものである。

The *intestines* are *boiling*. (はらわたが煮えくりかえる)

Anger *seethes* inside the body. (怒りが湧き上がってくる)

というものである。この 13 章においては英語、日本語のほかハンガリー語、中国語、ズールー語、ポーランド語、ウォロフ語、タヒチ語を比較参照しているが、仮に「怒り」のメタファーについて共通項が見出せたとしても、他の「喜び」や「悲しみ」のメタファー表現に共通項が見出せるとは限らない。この章においては、言語交流の少ないような複数の言語の例を抽出し、それらに等しくみられる概念メタファーを収集することで、概念メタファーの普遍性 (universality) を提示しようというところがなされているが、これら数言語における類似表現を見出しただけで「普遍性」といえるのかどうか、またいくつかの言語について類似表現を見出せば「普遍性」であるといえるのかという点においてこの論は不十分であるといえる。

加えて、認知言語学全体における問題であり、上記の問題点と通底するところもあるが、方法的な限界が存在する点である。つまり、まず何らかのメタファー表現が所与のものとして存在し、その存在の理由付けを見出すという、後追いの形でしか研究がありえないところである。これは心のモジュール性を標榜する生成文法と対比されるところであり、すなわち言語的結果から言語的原因を遡及的に思考する方法でしかないという在り方である。ただし、必ずしも経験科学的な手法であるところが悪いのではなく、それは例えば未だ存在しないメタファー表現についてその生成を推論できるような方法論が俟たれるということだ。本書はその可能性について踏み出すことはなく、Lakoff 以来の認知言語学の体系を強固にするようなものでしかないともいえる。

そして最後の指摘点として、本書のタイトル *Metaphor: A Practical Introduction Second Edition* についてであるが、本書の内容からして、「Conceptual Metaphor」や、あるいは「Metaphor In Cognitive Linguistics」というようなタイトルにすることで、議論が認知言語学上の概念メタファーについてのみのものであることを示すべきである。少なくとも現状のタイトルであれば、あたかも修辞学についての入門書か、あるいはメタファーの用法を示すような文法書であるような誤解を読者に与えかねない。

5. おわりに

本稿では、Kövecses (2010) 全体を俯瞰し、認知言語学のパラダイムのなかでどのような意義をもった著作であるかを確認した。そのなかで認知言語学が応答できていない問題点についても指摘した。

言語活動と人間の認知との連関を重視する認知言語学は、他者との言語的コミュニケーションの体系を理解するための端的なモデルを我々に供与してくれる。

参考文献

Grady, Joseph. 1997. *Foundations of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes*. California: University of California at Berkeley.

Lakoff, George. & Johnson, Mark. 1980. *Metaphor We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press

注

- (1) 「ドメイン (domain/領域)」という語は認知言語学上で極めて汎用されている語であるが、本書においては、「認知主体が対象を概念化するための枠組み」と考えれば問題はない。例えば「飲み物」というドメインにおいて「飲用水」と概念化されていた同じ対象が、ドメインの違いによって「真水」や「軟水」というような別の形に概念化される。